石川県七尾美術館だより

令和２年１月１日発行
編集･発行　(公財)七尾美術財団

第100号(冬号)

東京国立近代美術館工芸館移転連携事業

人間国宝を中心に･陶磁器の美と技

①富本憲吉《色絵金銀彩羊歯文飾壺》部分　1958 年
②十三代今泉今右衛門《色鍋島薄墨石竹文鉢》部分　1982 年
③吉田美統《釉裏金彩牡丹文飾皿》部分　2017 年
④荒川豊蔵《志野茶碗　氷梅》部分　1970 年

ISHIKAWA
NANAO
ART MUSEUM

展覧会紹介

令和2年1月4日(土)～4月19日(日)
休館日については裏表紙をご覧ください

東京国立近代美術館工芸館移転連携事業
「人間国宝を中心に・陶磁器の美と技」
12月14日(土)〔開催中〕～2月11日(火・祝)

◇第2展示室

いよいよ今年の夏、東京国立近代美術館工芸館が石川県金沢市に移転、開館します。それに向け県内美術館施設では、3800点を超える同館所蔵作品から様々なテーマで展覧会を開催、多くの関連イベントが催されています。

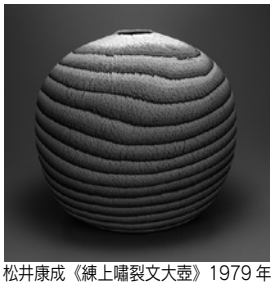
前号でもご紹介しましたが、現在開催中の本展も、その連携事業の1つです。同館所蔵作品から重要無形文化財保持者（人間国宝）の作品を中心に、陶磁器の名品45点を展示しています。近・現代陶磁器の名品がこれだけ一堂に展示されるのは、能登において初めてといわれます。

高度な技術はもとより、手の温もりが感じられる作品や洗練されたモダンな作品など、日本が誇る陶磁器の美と技をご覧いただくと共に、人間国宝をお招きしてのスペシャルなイベントなどへも、あわせてご参加ください。

石黒宗麿《彩瓷柿文壺》1959年

加藤卓男《三彩鉢　蒼容》1984年

三浦小平二
《青磁茜豆彩大皿　火焔山》
1982年


松井康成《練上嘯裂文大壺》1979年

本展関連イベント♪

①スペシャルアーティストトーク
日時：令和2年1月19日（日）
午後2時～3時
講師：吉田 美統 氏
（重要無形文化財「釉裏金彩」保持者）
十四代今泉今右衛門 氏
（重要無形文化財「色絵磁器」保持者）
司会：唐澤 昌宏
（東京国立近代美術館工芸課長）

★出品作家の吉田美統氏と、出品作家の十三代今泉今右衛門ご子息であります十四代今泉今右衛門氏が、制作についての解説や、出品作品についてお話してくださいます。

②ギャラリートーク
日時：令和2年2月11日（火・祝）
午後2時～2時40分
講師：成田 暢
（東京国立近代美術館工芸課特定研究員）

※①②共申込不要、高校生以上の方は観覧券が必要です。

同時開催
「冬の優品おもてなし ～等伯、浮世絵、現代絵画まで～」

◇第1展示室

当館所蔵作品と寄託作品より、絵画を中心に22点でおもてなしします。

長谷川等伯関連では、信春時代制作の「善女龍王図」と「陳希夷睡図」、四男左近制作の「羅漢図屏風」（個人蔵）を展示。石川県ゆかりの現代作家絵画からは、寺井重三、西房浩二など6点を紹介します。また、池田コレクションからは、北村西望作「池田文夫氏像」、重要美術品「後奈良天皇和歌懐紙」や近代日本画・書7点を展示。工芸では人間国宝による香合など5点（内4点は池田コレクション）も紹介します。

冬のひととき、様々な美をお楽しみください。

「雪中美人図」宮川長春
池田コレクション

「赤いチュチュ」寺井重三 1996年

「堆漆菊文香合」音丸耕堂
池田コレクション

※画像作品は全て当館蔵。

◇共通観覧料

	個人	団体
一般	500円	400円
大高生	350円	300円

※中学生以下無料・団体は20名以上です。

「新収蔵品展」「ノスタルジア」

2月22日(土)～4月19日(日)

◇第1展示室

「新収蔵品展」

平成7年に開館した当館の美術品収集活動は寄贈による部分が多く、購入を含め、現在では763点の所蔵品を収蔵しています（令和元年12月末現在）。このうち、平成27年度から平成30年度にかけて七尾市の所蔵となり、当館に収蔵された作品は、購入2点、寄贈19点の計21点です。内訳は日本画11点、洋画6点、彫刻1点、工芸3点。本展ではその中から未公開作品、石川県ゆかりの作家作品を中心に、日本画、洋画、彫刻、工芸の16点を紹介します。

【作家紹介】

■浜出青松（はまでせいしょう、1912～89）

羽咋郡志雄町(現・羽咋郡宝達志水町)に生まれ、羽咋中学卒業後、帝国美術学校（現・武蔵野美術大学）で日本画を学びます。在学中に憧れであった川端龍子の主催する青龍展に初入選、これにより龍子に認められ指導を受けるようになります。

「はな」浜出青松

「宴」稲元 実

復員後は石川県で高校教諭として勤める一方、青龍社展・日府展と出品を続けました。ご遺族からご寄付いただいた花を描いた2点の作品を展示します。

■稲元 実（いなもとまこと、1946～2013）

七尾市に生まれ、5歳で東京へ転居。武蔵野美術大学日本画科を卒業後、加藤東一に師事し、日展に初入選します。以降日展を舞台に、自身の「家族」や生命力溢れる「牡丹」を描いた作品の発表を続けました。ご遺族からご寄付いただいた4点の内3点を展示します。（他1点は第2展示室「ノスタルジア」で紹介します）

◇第2展示室

「ノスタルジア」

日常の何気ない瞬間や場所で、ふとノスタルジックな思いがこみあげてくる。そんな経験はありませんか。

一人公園のベンチに座り、どこか遠くを眺めている人がいたら、それは生活に追われる日々の中で、足を止め、過ぎ去った過去に想いを馳せる姿かもしれません。多くの人にとっては、子どもの頃に遊んだ公園、登下校の途中で道草をした野山、ともに過ごした友人たち、足しげく通った様々な場所、時代を反映したヒット曲などが郷愁を誘う要素でしょう。一方、家族との時間を象徴する個人的な事物や歴史を留める建造物などが要素となる場合もあり、そのタイミングは人それぞれです。旅先の風景に、既知感をおぼえ「前世の記憶では？」とロマンを抱くのはまだしも、訪れたことのない場所の風景にさえ、懐かしさを抱くのは何故でしょう。

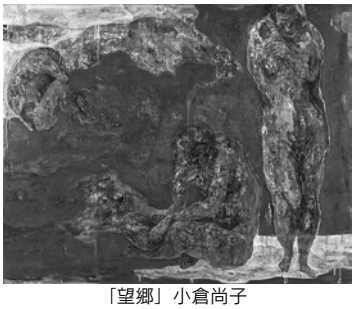
本展では、故郷や家族の姿、生活の記憶、時代を象徴するモチーフなど、ノスタルジックな作品を選び日本画、洋画、彫刻、工芸、書の24点に「複製松林図屏風」（原本：長谷川等伯、東京国立博物館蔵）を加えた25点でご覧いただく予定です。

作者はモチーフに何をみたのか。鑑賞者は何をみるのか。

作品からノスタルジア（郷愁）を感じとっていただければと思います。

「沈金彫水引草飾箱『古城尓而』」山岸一男

「母の像（祖母シゲ）」田中太郎



「望郷」小倉尚子

◇共通観覧料

	個人	団体
一般	350円	280円
大高生	280円	220円

※中学生以下無料・団体は20名以上です。

貸館催し物案内

アートホール

石島音楽教室 ピアノ・エレクトーン発表会

無料入場

2月11日（火・祝）　開演　13時30分

それぞれの思いを演奏に。幼児から大人の方がソロ・アンサンブルで演奏します。今年は物語とともに演奏する「音楽紙芝居」にチャレンジします。是非ご来場ください。

主　催　石島亜希子門下生

連絡先　石島　☎090(2090)1861

オーケストラの日 in のと

無料入場

3月25日（水）　開演　午後2時

オーケストラにもっと親しんで楽しんでいただこうと全国各地で3月にオーケストラの日を展開しています。能登は七尾にて弦楽五重奏の響きをトークと共にお届けします。入場無料です。

主　催　（公財）石川県音楽文化振興事業団

連絡先　同右　☎076(232)0171

第20回友の会鑑賞の旅実施報告

今年で20回目の実施となる「友の会鑑賞の旅」。11月6日(水)、23名のご参加を得て京都方面への旅路となりました。

最初の目的地・京都国立近代美術館では、特別展「円山応挙から近代京都画壇へ」を鑑賞。京都画壇の名作がズラリと並ぶ様子は実に圧巻でした。中でも目を引いたのは、応挙の代表作として知られる兵庫県・大乗寺蔵の襖絵です。芭蕉の鮮やかな緑や子どもたちの可愛さに、観ているうちにいつのまにか作品に引き込まれてしまいます。参加者の皆さんは音声ガイドを活用したり、お気に入りの作品グッズを購入したりなど、思い思いに楽しんでいるようでした。

近代美術館前で平安神宮の大鳥居を眺めます

昼食をはさんで次の目的地である、名刹南禅寺の塔頭・金地院へ。解説付きの特別鑑賞で方丈と庭園を見学しました。方丈では長谷川等伯筆の「老松図」「猿猴促月図」の両襖絵を鑑賞。雄大でのびのびとしたタッチの松や、緻密な描写の愛らしいテナガザルなどを、じかに観ることができ感激のひとことです。

南禅寺山門にて

次に小堀遠州作、小方丈の茶室「八窓席」を見学。「八窓」の各窓から差し込む光でほのかに照らされるお茶室内は、幽玄に満ち時代情緒タップリ。まるで400年前にタイムスリップしたような気分です。枯山水庭園「鶴亀の庭」では、遠州の人となりにしばし想いを馳せました。

見学後は南禅寺界隈を自由散策。木々が色づく秋の京都を楽しみました。

天候にも恵まれ、参加の皆様や見学先の皆様のご協力により、今回も無事終えることができました。本当にありがとうございました。

友の会美術講座実施報告 「日本画体験～干支を描く」PART2

本年度の当館友の会美術講座は「日本画体験～干支を描く」の第2弾。前年に続き日本画家・土農力氏を先生にお迎えし、12月15日(日)に8名のご参加で実施しました。

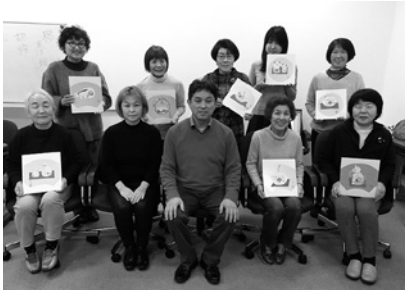
最初に先生より日本画の基礎について説明。顔料や膠の実物をみるのは初めての方もおられ、皆さん興味津々のご様子。

そしてめいめいがモチーフにするネズミの置物を選択し、早速下描きを始めます。作業の合い間には先生のわかりやすいレクチャーやアドバイスなどもあり、最初はやや緊張気味だった方も徐々にリラックスしていきました。

色紙に原画をトレースして、作業もいよいよ佳境の彩色へ。胡粉の白色から着色をはじめ、少しずつ色数を増やしていきます。色紙上にだんだんと姿を現してくるかわいいネズミに皆さんのテンションも高揚。おのずと筆運びも加速します。

最後に金泥を加え、落款を入れてついに完成。8人8様のネズミはとても個性豊かで、皆さんとてもお上手でした。

講座の途中には、展示室にて出品中の先生の作品を解説付きで鑑賞。楽しくためになるお話に、皆さん日本画に関心を深められているようでした。



土農先生ご夫妻と参加の皆さま

今回も長時間ご指導いただきました土農先生と奥様の多寿美様、そしてご参加いただきました皆さま、本当にありがとうございました。

ボランティア研修旅行実施報告

当館では、監視ボランティアスタッフを対象に、毎年研修旅行を実施しています。今回は10月15日(火)に、ボランティアさん20名と職員3名で、小松市の那谷寺と、金沢湯涌夢二館へ行ってきました。

那谷寺では、木崎ご住職様の深く楽しいご説明を聞きながら、2つの国名勝指定園と国指定重要文化財の本殿などを見学。展望台から見る庭園の眺めは見事で、皆さん心癒されたことでしょう。

昼食は那谷寺近くで、お寿司に茶碗蒸しと天ぷら付きのランチをいただき、ほっこり温まりました。

次に、金沢湯涌夢二館へ。まずは、夢二や夢二を取り巻く女性たちについて、太田館長が興味深い解説をしてくださり、続いて川瀬学芸員が開催中の企画展「夢二の美人画in欧州-イッテン・シューレの日本画講習とその前後-」をご案内くださいました。海外での活動や作品も知ることができ、夢二の魅力を再発見しました。

台風の後で心配しましたが、雨にもあたらず、有意義な研修旅行を終えることができました。ご参加いただいた皆様、ありがとうございました。これからもよろしくお願いします。

那谷寺にて木崎ご住職様を囲んで

太田館長の解説に真剣に聞き入る参加者たち

ランチタイム♪

等伯コーナー
「長谷川等伯展」特別講演会報告

「長谷川等伯の大画面をめぐって -等伯研究史に沿いながら-」

講師　河合 正朝 氏
（千葉市美術館館長、慶應義塾大学名誉教授）

大学の卒業論文で私は長谷川等伯について書いたのですが、その後、等伯研究から長年離れておりました。それが昨年アメリカ・ニューヨーク市の「ジャパンソサエティギャラリー」で等伯展が開催された際に、日本からの作品出品や図録執筆などのお手伝いをし、久しぶりに等伯と再会したんです。そのことがご縁で、今度は七尾で等伯について講演をさせていただくことになりました。今回は展覧会のテーマが襖や屏風などの「大画面作品」ということで、「等伯の大画面をめぐって」と題してお話をいたします。

【等伯の出自】

まずは本題に入る前に、皆様すでにご承知と思いますが、等伯の生い立ちから活動の軌跡を追いかけていきたいと思います。かつて信春と等伯は別人とされていました。それを変えたのが等伯研究の第一人者であった土居次義先生で、等伯は能登七尾の出身の信春という絵師と同じ人物だということを指摘されたんですね。先生は等伯研究をライフワークとして作品や史料の発掘に努められ、京都の本法寺所蔵「日蕚上人像」の落款などを根拠としながら等伯と信春が同一人物だと立証されたのです。現在、その説はほぼ揺るぎないものになりました。

等伯の画系については『等伯画説』（京都市・本法寺蔵）記載の系図がよく知られています。それは、雪舟等楊から始まりその弟子等春、さらに等春の弟子筋に無分（文）、宗清という画家がいたということが簡単に記されたものです。実際に等伯は、作品中の落款でも自分は雪舟から五代目の画系を継いでいるのだと主張しています。しかしこの系図を一体どのように解釈すればよいのかという問題があったんですね。そこで土居先生と並んで等伯研究の権威である山根有三先生は、別の史料に名がある等伯の養祖父・法淳を三代目にあて、四代目を養父の宗清として五代目を等伯とする説を立てられました。

その後、当時東京国立博物館にお勤めされていた松原茂さんによって、長谷川家の菩提寺である七尾の長壽寺が所蔵する「涅槃図」が、無分の筆であることが判明しました。すると「無分→宗清→等伯」としてすっきりした系譜ができるわけですけれども、果たして無分が法淳と同一人物なのかは史料や作品が出てこないので、現時点では残念ながら詳らかではありません。しかし無分の作品が出現したことは非常に重要で、それにより無分が優れた腕を持つこと、そして無分が描いた「涅槃図」の様式がほぼ忠実に宗清や等伯ら「長谷川派」の絵師たちに継承されていったことがわかります。

それからもう一つ。15世紀頃から地方豪族などの武家階級の人たちの中から、近世の様々な職業技術集団が誕生してきます。画家でしたら雪舟等楊は備中国（岡山県）の地方豪族の出身、狩野正

信は関東の小田原北条氏の家臣、雲谷等顔は肥前国（佐賀県）の武家出身、尾形光琳の曽祖父・道柏は近江国（滋賀県）浅井氏の家臣といった例を挙げることができます。このように武家出身の人たちが画家や工芸家などとして、当時の芸術の担い手になっていった。等伯の生家・奥村家と養子先の長谷川家はともに武家でもあったそうですから、等伯もそのひとりといえるわけです。

「涅槃図」無分筆　七尾市・長壽寺蔵
※令和２年度「長谷川等伯展」で展示予定

【等伯の大画面学習】

等伯は信春の時代、仏画や肖像画、花鳥画といった小さな画面の掛け軸を中心に描いていました。大画面画については「涅槃図」の例もあるものの、現時点では鑑賞画の屏風が3点のみです。

そのうち信春時代の代表作とされるのが「牧馬図屏風」（東京国立博物館蔵）で、かつては「信春」の印章があったのですが、後世に剥ぎ取られてしまったということです。野原のあちこちに寝転がったり跳ね上がったりなどする野生の馬たちが様々な姿で描かれており、すでに風俗画的な要素がみられる点にも、等伯が桃山時代の画家であるという性格が表れているように思います。

アメリカで等伯展を開催するきっかけとなりました、金碧の「花鳥図屏風」。近年ニューヨーク在住の日本美術コレクターが購入した作品です。この作品からは仏画や人物画などを描いていた等伯が、桃山時代的な雰囲気の花鳥画をも手掛け始めたことがわかります。現在は一隻ですが、画面が春と夏ですので、もとは秋と冬を描いたもう一隻があったと思われます。落款や印章はないのですが、「牧馬図画風」との画風比較などからしても、等伯の筆であることは確実ですね。

花鳥画の学習について等伯（信春）は、中国元～明時代の比較的小ぶりな花鳥画などから始めたようです。そして雪舟も「拙宗」を名乗っていた若い頃には中国元・明の小画面画を描いていたのが、明に渡り大画面の空間やその表現を学び感性・直観を育むことによって飛躍したのと同じように、等伯も改名する前後のころに、明の大画面画を地道に勉強したのではないでしょうか。

やがて等伯は大画面画家として活動していきますが、その飛躍のきっかけというのはどこにあったのか。それはおそらく、雪舟より、むしろ「狩野派」との接触によるものでしょう。『等伯画説』には、等伯が大画面制作に際して手本としたであろう画家たちとして、牧谿や能阿弥などとともに狩野正信や元信の名前もみられます。「狩野派」の大画面画に影響を受けつつ、そこから脱却して独自のスタイルを築いたんですね。後に、等伯の長男久蔵が等伯の画風を継承しつつも、やや「狩野派」的な画風に「回帰する」のは興味深い現象といえます。

等伯は「雪舟五代」を名乗った60歳頃以降には盛んに「雪舟流」を標榜しますが、実はそれ以前はあまり「雪舟風」ではありません。ですから等伯の大画面への挑戦は、雪舟ではなくて「狩野派」に触発されたからこそなんですね。確かに「花鳥図屏風」（岡山県・妙覚寺蔵）には、雪舟筆「四季花鳥図」を写したものという言説がある。私もそう思っていました。しかし、そもそも、狩野元信の花鳥図は、雪舟の影響を受けているんですね。

元信の父・正信の伝記の中で、雪舟が正信の絵をみて「自分と同じような絵を描く」といったようなことも書かれています。ですから「狩野派」の花鳥図は雪舟学習に基づいているんです。それをふまえて妙覚寺蔵の「花鳥図屏風」をみると、等伯が「狩野派」を介して雪舟を学んでいることがわかるかと思います。榊原悟さん（現・岡崎市美術博物館館長）の、大徳寺・聚光院室中の襖絵「梅に小禽図」を下敷にしているというご指摘は傾聴に価します。

一方、山水画に関しても私のみるところ「雪舟風」ではないんですね。等伯が「等伯」と名乗って間もない頃、51歳時に大徳寺の三玄院で描いた「山水図襖」（京都市・圓徳院蔵）という有名な作品があります。これは同じく大徳寺の真珠庵が所蔵する「曾我派」の画家が描いた「山水図襖」に学ぶところが多いんです。つまり等伯の山水画は雪舟でなく「曾我派」から始まったということになるのです。それは捺された印章から早い時期の制作とされる山水画「瀟湘八景図屏風」（東京国立博物館蔵）や「山水図屏風」（伊勢市・等観寺蔵）の画風からも容易に理解できるでしょう。

「松竹図屏風」長谷川等伯筆　当館蔵

なお江戸時代の画伝には「等伯は曾我紹祥に学んだ」と書かれており、おそらく当時の人びとは等伯の画風について、そのように解釈していたのでしょう。

【大画面画家への飛躍と「雪舟風」】

京都移住後、等伯は信春の時代から大きく飛躍します。「等伯」を名乗った頃からはほとんどが

大画面画になるんですね。等伯の大画面画としては「楓図壁貼付」（京都市・智積院蔵）や「松林図屏風」（東京国立博物館蔵）などがよく知られています。そしてそれらに繋がっていく一番早い時期の先行作品として私が注目するのが「老松図襖」（京都市・金地院蔵）です。

構図などをみても「老松図襖」は、狩野永徳を意識したものであることは明らかです。筆法は「狩野派」とは異なり、墨の使い方などは牧谿や能阿弥を参考にしているようにみえます。特に牧谿について等伯は『等伯画説』の中で「和尚は玉を盤の上に回すがごとく自由な筆」だと。つまり筆を描線主体ではなく面として使用し、墨のグラデーションを活かした自由な筆の使い方であると称賛しています。この線を意識しない描法を「没骨法」といい、中国で8～9世紀頃に誕生したのですが、それを継承したといえる画家のひとりが牧谿でした。

等伯がその描法を本格的に体得したのが50歳代の初め頃であり、成果が「老松図襖」で存分に表れたのではなかったかと。そして等伯を牧谿の世界にふれさせる指導を行ったのが本法寺の住職・日通上人だったと思います。

そして慶長4年（1599）。その年は翌年に「関ヶ原の合戦」を控えた日本の大きな転換期でした。その大きな時代のうねりの中、等伯は本法寺に「仏涅槃図」を描き、「雪舟五代」を名乗ります。ライバルの「狩野派」も永徳没後の体制を整えてゆく中で、生き残りをかけて等伯が選んだ道は、「狩野派」に対抗し得る「画系の正しさ」を標榜することだったんですね。

「雪舟流」を打ち出した翌々年、等伯は大徳寺の真珠庵に「商山四皓図」などの襖絵を描きました。それまで「牧谿風」の柔らかいグラデーションが専らだった描法が、線を強調した荒々しい筆使いに変化しており、明らかに「雪舟風」を意識していることが解ります。それは画風の大きな展開・飛躍であり、私は確実に「雪舟風」の絵が描けますよということを主張するためでしょう。61歳筆の「山水図襖」（京都市・隣華院蔵）にも同じく「雪舟風」へのシフトがみてとれます。

ちなみに「松林図屏風」ですが、遠くからみると霧に包まれたような松林が柔らかいタッチで描かれたように感じられますが、近くでみるととても勁く、激しい筆使いなんです。それをふまえた上での私の様式論で判断すると、「松林図屏風」の制作年は等伯が「雪舟風」を意識した後、つまり慶長5年前後であると思うのです。

【「法眼落款」とされる作品】

等伯の晩年期とされる作品の中には「長谷川法眼等伯筆」という落款を使用した作例が出てきます。いわゆる「法眼落款」の作品です。その中には本当に等伯の筆かと疑う作品が存在します。等伯を研究する上では避けて通れない問題なのですけども、作品が持つ形式や表現、特に画面における空間の表現を考えた時に、同じ等伯作品の中でも50歳代制作のものと「法眼落款」のもののうち何点かとの間には、明らかに相当な距離があるのです。「楓図」や「松林図」では画面中の空気感や空間における奥行表現が十分に感じられるのに対して、それらの作品はとても平板であり、図面的で、そこには前二者にみられるような暗示的な三次元性が意識されているようには思えない。

私は絵画をみるとき、その作品に表されている空間をみます。絵の中に、創られ、表現される空間がどのようになっているかをふまえて、その作品の作者や時代の特色をみていきます。落款印章や描法筆致も重要ですが、最終的には空間が問題ですね。部分だけをみるから騙されるわけで、特に絵画の場合は空間全体をみないとダメなんです。二次元の平面にどのようにして三次元的な空間が暗示的に構築されているのか、はたまた仮想的に再現されようとしているのか。

その点からみると、「法眼落款」作品には落款の文字は同じなのに空間意識が全く違うものがある。例えば画面に展開する金地の面なども、そこに奥行を感じさせない単なる空間の遮蔽物になっています。それが1600年前後に描かれた等伯作品との間の違いとして表れているのです。この差は桃山時代の絵画史の上での天正時代（1590年代）の絵画と寛永時代（1630年代）の様式の上での差に置き換えることもできるでしょう。

確かに慶長時代と寛永時代では画風が異なっている画家がいます。例えば等伯の少し後に活躍した俵屋宗達にも同じような傾向がみられます。それは「風神雷神図屏風」（京都市・建仁寺蔵）と「舞楽図屏風」（京都市・醍醐寺蔵）の間の空間の捉え方の違いです。その主な理由として、そこにはそれぞれの時代の空間意識・美意識が大きく反映されるからであります。つまり慶長時代の美意識では絵画に暗示的な三次元の空間表現が求められていたんですけれども、寛永時代の美意識はそれが求められてはいない。時代に応じて画家も画風を変化させるということなんですよね。それでは等伯画の場合は果たしてどうだったのでしょうか。

【最後に】

さて今回、私がお話したことをぜひ皆さんの目で作品を確かめて欲しいのです。それには実物をみるのが一番です。写真ではどうしても限界があり、実物をみてこそ感じ捉えられることが多々あります。それこそが美術鑑賞の醍醐味であり、また展覧会の良さなんですね。ですから、ぜひとも展覧会に足を運んでください。

本文は平成31年4月29日に行われた「長谷川等伯展」特別講演会の内容を、当館の責任においてまとめたものです。

これからの展覧会予定

令和2年4月25日(土)～5月24日(日)〈会期中無休〉

◆第１・２・３展示室　開館25周年記念特別展

「長谷川等伯展　～能登の信春 - The time of young Tōhaku～」

平成７年（1994）の開館以来、来年４月でちょうど 25 周年を迎える当美術館。その記念すべき節目の年に開催する「長谷川等伯展」は「等伯の生誕地ならでは」のテーマとして「等伯の能登時代」に焦点をあてます。

天文８年（1539）に能登国七尾に生まれた等伯は、絵仏師「信春」としておおよそ 30 歳代頃まで同地を拠点に活動をくり広げていました。従って現在も能登地方や富山県などには、彼の若年時制作になる名品が伝来しています。

そこで本展では、等伯「能登時代」制作の仏画を中心に展示。また等伯の養父宗清（1507 ～ 71）や能登生まれの長男久蔵（1568 ～ 93）など、能登ゆかりの「長谷川派」絵師の作品も加えて約 40 点を紹介いたします。

出生の地・能登で等伯の「源流」にふれてみてはいかがでしょう。

国指定重要文化財
「鬼子母神十羅刹女像」
長谷川信春(等伯)
高岡市・大法寺蔵

令和2年度　石川県七尾美術館友の会会員募集のご案内

新年度友の会会員を次の要領で募集いたします。現在会員の方で更新をご希望される方は改めてお申込みください。お申込みのない場合はそのまま退会となってしまいますのでご注意ください。

★入会手続き★　①受付開始　３月１日(日)から【年度会費1,000円】※１
②受付場所　当館受付カウンターまたは郵便受付　※２
（郵便振替用紙をご利用ください）

※１　会員証のお渡しは美術館だより第101号（春号・令和２年４月１日発行予定）と一緒にお送りします。
※２　郵便局備え付けの振替用紙の通信欄に必要事項《会員の区別(更新･新規･元会員)･郵便番号・住所･電話番号･氏名》をご記入のうえ、会費を添えて最寄りの郵便局窓口へお出しください。
払込手数料はご負担ください。

郵便振替口座番号	００７１０－０－５０７９５
加入者名	石川県七尾美術館　友の会

★友の会特典★

その１ 当館主催展覧会の観覧料が割引になります。
その２ 情報満載「美術館だより」をお送りします。（年度内４回発行）
その３ 相互割引提携館主催の展覧会観覧料が割引になります。（会員本人のみ）
その４ 特別企画展開会式･内覧会にご招待します。（無料）
その５ 販売グッズが割引になります。（一部除く）
その６ 喫茶室利用代金が10%割引になります。（10円未満切捨）

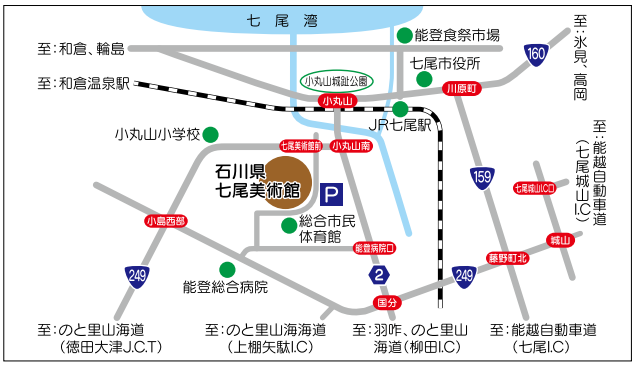
「不白茶碗　銘千鶴万亀」
川上不白（池田コレクション）

令和２年度 石川県七尾美術館 友の会会員証

※左記のほかにも友の会会員限定の催し、特典がございます。
４月からご活用ください。ご入会をお待ちいたしております。

プレミアム・パスポート　PREMIUM PASS　子育てにやさしい店
割引、プレゼントなど特典いろいろ！
ぜひ当館でもご利用ください。

無線でネット　FREESPOT　ブロードバンド・オアシス
エントランスホール及びティールームにて、Wi-Fiスポットサービスの「FREESPOT」をご利用頂けます。



飛行機……のと里山空港から「のと里山海道」利用約45分
車……「のと里山海道」徳田大津J.C.Tから約15分又は「能越自動車道」七尾城山I.C又は七尾I.Cから約10分
タクシー…JR七尾駅から約５分
徒歩……JR七尾駅から約20分
市内循環バス「まりん号」
……JR七尾駅前「ミナ.クル」バス停から「七尾美術館前」下車(順回り約8分･逆回り約14分、1日各8便)
ななおコミュニティバス「ぐるっと７」
……JR七尾駅前５番乗り場から「小丸山台１丁目」下車(西コース約10分、１日４便)

◎次号・第101号（春号）は４月１日発行予定です。

日	月	火	水	木	金	土	2020 1 January
			1	2	3	4	
5	6	7	8	9	10	11	
12	13	14	15	16	17	18	
19	20	21	22	23	24	25	
26	27	28	29	30	31		

日	月	火	水	木	金	土	2 February
						1	
2	3	4	5	6	7	8	
9	10	11	12	13	14	15	
16	17	18	19	20	21	22	
23	24	25	26	27	28	29	

日	月	火	水	木	金	土	3 March
1	2	3	4	5	6	7	
8	9	10	11	12	13	14	
15	16	17	18	19	20	21	
22	23	24	25	26	27	28	
29	30	31					

◆1月～3月カレンダー◆　※■は休館日
◆開館時間◆　午前９時～午後５時
（入館は午後４時30分まで）

〒926-0855　石川県七尾市小丸山台一丁目1番地
TEL(0767)53-1500／FAX(0767)53-6262
http://nanao-art-museum.jp